

海女さんとたらい舟

アジアでジオパークに取り組む地域が集まる大会が、韓国の濟州島で開かれ、佐渡ジオパークから2人が参加し、教育分野におけるジオパークの取り組みについて紹介しました。

開催地となった濟州島は、生物圏保護区、世界自然遺産、世界ジオパークの3つの事業に取り組む「ユネスコトリプルクラウン」を持つ島で、佐渡のお手本となり得る島です。

ジオパークの視点から見て共通する部分は、濟州島は火山島であるため、その海岸風景は、大昔の海底火山によって形成された小木半島の海岸とよく似ています。

では、小木半島でよく見られる「たらい舟」は、濟州島でも存在するのでしょうか。正解は、見られません。その代わり濟州島には大勢の海女さんがいて、海女さんの博物館もあります。火山島である濟州島は、雨がすぐに地下にしみ込む土地であるため、大きな川も無く、稲作ができず、粟や麦などを食べていた時代もあつたそうです。そこで、島の人々、特に女性は豊富な海産物を求めて海へ出て生活を支えていました。

一方のたらい舟、小木半島の集落では「桶を半切り」にして使い始めたことが

ら「はんぎり」と言われています。この地で発展したのは、いくつかの要因があります。隣の羽茂に樽職人や味噌会社があつたこと、材料となる木材や竹が豊富だつたこと、そして、浅瀬が広がる岩礁地であつたことなどの理由が考えられます。

似た景色を持つアジアの中であつても、島をつくっている大地が違うと生活様式や文化まで異なってくるのです。つまり、私たちの現在の生活は、大地と深く関わっているのです。その繋がりを実感することのできる場所が、ジオパークです。

私たちは「たらい舟」という小木というイメージがわきますが、島外の人にとっては、島のどこでも使われている乗り物に感じているかもしれません。普段、当たり前に見て、聞いて、食べているものであつても、島の外の世界から見たら貴重で珍しいものが周囲に溢れています。皆さんも探してみませんか。

◆教育委員会社会教育課ジオパーク推進室（両津郷土博物館内）

☎ 23 | 2101



小木のたらい舟



佐渡ジオパーク

ジオパーク、推進日記 32

尖閣湾く佐渡ジオパークの先駆け

尖閣湾は、外海府の西寄りに広がる断崖で、今や佐渡の一大観光地になっています。佐渡は、明治時代から新潟との定期航路が開発され、日蓮や順徳上皇の旧跡をめぐる旅を中心に、観光地としての歩みを始めました。その中で、尖閣湾が観光客の押し寄せるスポットとなったのは昭和初期からです。大正8年に、史跡名勝天然記念物を保護する法律ができたことにより、全国各地で調査が展開され、佐渡では、昭和7年から外海府海岸と小木海岸の地質学的な調査が行われました。

大正時代までの佐渡地図には、「尖閣湾」の名が見られません。昭和8年に佐渡を訪れた地質学者の脇水鉄五郎博士が、ノルウエーの「ハルダンゲル峡湾」になぞらえて命名した地名です。昭和9年には、外海府と小木の海岸が国の名勝や天然記念物に指定され、一躍注目を浴びることとなりました。外海府は、雄大な海岸美が観光資源となり、多くの人々が尖閣湾を訪れました。現在もおなじみの遊覧船による周遊は、すでにこの時期から始まり、地元で3つの観光会社が生まれるほどのにぎわいでした。

当時は、姫津や達者に加え、相川一



吊り橋・磯漁・遊覧の小舟 (提供:尖閣湾揚島遊園)

町目からも遊覧船が就航し、尖閣湾で磯漁をする漁船の間近を通るのでかな風景も見られました。80年前にさかのぼるこの歴史は、外海府の海岸を保護しながら、多くの人々から景観美を楽しんでいたとき、それにより地域も元気になるといいう、まさに現在のジオパークが目指す姿です。

◆教育委員会社会教育課ジオパーク推進室(両津郷土博物館内)

☎ 23-2101

佐渡ジオパークを「見る・食べる・学ぶ」

平成25年11月に、日本ジオパークの認定を記念した講演会を開催したところ170人を超える方々にお集まりいただき、ありがとうございました。

講師の日本ジオパーク委員会の尾池和夫委員長は、佐渡を訪れるのが初めてということで、講演の前に相川や小木半島など島内のジオサイトを視察しました。その中で、尾池委員長の目に留まったのが、元小木集落で野菜や衣類などを洗うのに使っている洗い場です。

湧水を利用してこの洗い場の脇には、溶岩が海中に流れ出て冷やされて固まってできた「枕状溶岩」と呼ばれる岩が広がっています。尾池委員長が洗い場へいくと、ちょうど、地元の方が大根を洗っていました。大根を洗う人の傍らに寄り添う枕状溶岩という光景を、微笑ましく尾池委員長は眺めていました。

視察を終え、夕方から始まった講演会では、尾池委員長の専門で



元小木集落の洗い場を訪れる尾池委員長

もある地震のメカニズムの話や、謎が詰まった佐渡ジオパークが世界の研究者たちにも注目される島になる可能性などについて話が広がりました。尾池委員長は、「約1600万年前に誕生した日本海は、現段階において世界で最も若い海です。その若い海に浮かぶ佐渡島で展開される『佐渡ジオパーク』では、住民が身近にある貴重な宝に気づき、自分の言葉で誇りを持って発信し続けてほしい。」と期待を寄せていました。

尾池委員長は著書「四季の地球科学・日本列島の時空を歩く」(岩波新書)の中で、ジオパークの本質は、地質学だけではなく、大地の科学、生態系、愉しむ場の3つが揃っていることが大事であるとし、「見る・食べる・学ぶ」という言葉でジオパークを表現しています。

佐渡では、どんな風に「見る・食べる・学ぶ」ことができるのか、それを実現できるのは、島に住み、島の特性を常に肌で感じている住民の皆さんなのです。提案や意見を交わしながら一歩一歩、ジオパークを作っていきます。

◆教育委員会社会教育課ジオパーク推進室(両津郷土博物館内)

岩屋洞窟(1) — 海食洞・縄文文化・霊場 —

小木半島の宿根木にある岩屋洞窟は、波の作用で浸食を受けた洞窟です。現在海からは離れ、しかも長い石段をのぼりつめた、標高約70mの場所にあるので、波に洗われたという感覚が持ちにくい場所ですが、小木半島が長い間に持ち上がり、およそ8万年前に今の状態になったと考えられています。

この洞窟

約8千年前に縄文時代(早期)の人々が生活をしてきたことが、昭和42年から行われた発掘調査で明らかになりました。これは、佐渡で発見されている縄文遺跡の中で最も古いもので、佐渡に人が住み始めた頃の遺跡と考えられています。



岩屋洞窟

その後、この洞窟は信仰の場として活用されました。洞窟の中には約1千年前に刻まれたと見られている古い3体を含め、8体の摩崖仏があります。

このほか、たくさんのお地藏様や、表情豊かな観音様が並んでいます。お地

蔵様の上段には、中国風の冠を着けた厳しい表情の仏像が並んでいます。これは、人が亡くなった後、7日ごと



石仏

に生前の行動について裁判を行うといわれている「十王」像で、閻魔王がその代表です。石仏の十王としては、佐渡では珍しい仏像です。現在も宿根木地域の人々により、毎月念仏がここで続けられています。

このように岩屋洞窟は、自然の力で作られた洞窟に、大昔の人々が住み着き、やがて信仰の場所として現代に受け継がれています。大地の成立ちと人の生活や文化を結ぶストーリーをもつ場所として、貴重なジオパークのスポットです。

◆教育委員会社会教育課ジオパーク推進室(両津郷土博物館内)

☎ 23 | 2101



岩屋洞窟(2) — 四国遍路へのあこがれ —

岩屋洞窟の前庭には、観音様をはじめ数多くの石仏が並んでいます。これは四国八十八ヶ所の仏たちです。四国遍路は現在も日本人にとって人気の高い旅行ですが、江戸時代から庶民が一生に一度は実現したい旅のひとつでした。

しかし、佐渡では農業生産の労働力を確保するため、島から外へ出る人数を制限していましたので、旅に出るのも奉行所の許可が必要でした。また、徒歩での四国への旅は2か月から3か月の期間とそれなりの旅行費用がかかり、すべての人が果たせた夢ではありませんでした。

そこで、代わりとなるお寺やお堂を佐渡島内に88か所設定し、それを巡ることで四国遍路の旅に置き換えていました。この伝統が現在の「佐渡八十八ヶ所」(佐渡遍路)に受け継がれています。ただ、島内の巡礼にも7日前後の日数が必要ですので、1か所に88体の仏様をまとめた、いわば最短の代替え四国遍路の姿を岩屋洞窟で見ることができません。

これらの石仏は、約2百年前に活躍した椿尾の石工五兵衛が彫ったものです。石仏や石白の材料となる

石英質安山岩(デイサイト)の産地として知られている椿尾では、江戸時代の中ごろから石仏や石塔が盛んに作られました。それらは佐渡全島に広がり、島外にも移出されています。

椿尾の石切場は、今年ジオサイトとしての整備が進みました。大地の恵みが地域の産業に結びついているジオパークのテーマを、椿尾で見ることが出来ます。岩屋洞窟の四国八十八ヶ所石仏は、椿尾と宿根木のジオサイトを結びつける上でも、貴重な文化遺産です。

◆教育委員会社会教育課ジオパーク推進室(両津郷土博物館内)

☎ 23-2101



四国八十八ヶ所の石仏

霧島山と金北山に咲く花はなぜ違う？

春といえば、きれいな草花。毎年、その草花を楽しみに多くの方々がトレッキングに訪れています。私たちが暮らす佐渡には、たくさん草花が自生していますが、環境が変わると自生する植物の種類にも影響があります。

宮崎県と鹿児島県の5市2町で展開している霧島ジオパークには、標高1700mの韓国岳を最高峰とする火山群の総称である霧島山があります。霧島山の植物の特徴は、同じ場所でも生息する植物が火山活動とともに移り変わっていくことです。新燃岳が噴火した直後の火口周辺は何もない裸地でしたが、噴火から3年経った今では、ミヤマキリシマが咲き始めたそうです。ミヤマキリシマは火山性のガスや土壌に強く、噴火後の大地に根付く先駆的な植物です。そして、火山の活動が静まり、数百年から1千年くらいの間に噴火がなく森林化が進むにつれ、ミヤマキリシマの自生地は次第になくなっていきます。このように、大地の動きによって、自生する植物の種類も移り変わっていきます。

それでは、佐渡島の環境はどうでしょう。佐渡の山々は、太古の火山から噴き出したものが海中に没し、それ

らが隆起して形成されました。活火山ではないので、火山灰や火山ガスなどの影響で植物

が時間とともに変化することがありません。また、佐渡は北緯38度線上に位置しているため、北方と南方の豊富な種類の植物が自生していることや、多くの草花を食べてしまう鹿や猪が生息していないので、動物による食害で絶滅していく草花が少ないことも特徴です。

私たちの周りに咲いている草花は、その土地の風土と深い関係があります。佐渡は、数多くの草花が自生する花の島です。いつまでもこの草花を多くの人が楽しめるよう保護していくことも大切です。

春を彩る草花を楽しみながら、足元の大地にも注目してみたいかがでしょうか。

◆教育委員会社会教育課

ジオパーク推進室(佐渡博物館内)

☎ 52-2447



おいしいイカはいかが？

今年に入り、日本海側でダイオウイカが次々と定置網にかかったり、浜に打ち上げられたりしています。

平成26年4月1日現在、捕獲されたダイオウイカ10匹のうち、6匹が佐渡沖で捕獲されました。

ダイオウイカは水温6度から10度ほどの深海に生息し、小笠原諸島沖など温帯海域を好みます。日本海には、水深300メートルの深さに「日本海固有水」と呼ばれる水温0度から1度ほどの冷たい水の層があるため、水深200メートル付近に上があればダイオウイカは生息できるとみられています。

私たちが日頃食べているスルメイカ(マイカ)も暖かいところが好きで、日本海を暖流に乗って移動します。春から秋にかけて東シナ海から日本海を暖流に乗って北上し、北海道の稚内付近まで移動します。そして十分に成長したイカは秋から冬にかけて南下し、生まれた海域に戻って産卵します。

イカは暖かい暖流には乗りますが、冷たい寒流には乗りません。佐渡島は、温かい暖流と冷たい寒流がぶつかる場所に位置しているため、佐渡沖で多く水揚げされるのです。



泳ぐイカ

もし、寒流と暖流がぶつかる場所であれば、イカたちは暖流に乗って佐渡沖を通過していつてしまい、私たちが食べるイカの量も少なくなっていたかもしれません。

6月が水揚げの最盛期となるスルメイカのほか、佐渡ではヤリイカやソデイカなども水揚げされ、島民にとつて最も身近な存在です。佐渡の夏の風物詩である「漁火」を眺め、イカたちが暖流に乗っている姿を想像しながらイカを噛みしめてみてはイカがでしょう。

◆教育委員会社会教育課

ジオパーク推進室(佐渡博物館内)
☎ 52-2447

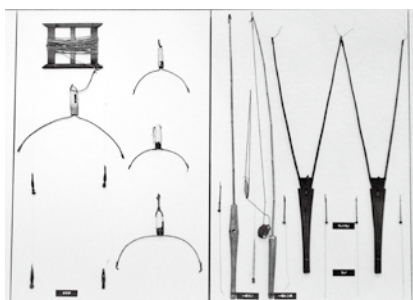
イカをいかに獲ってきたか

スルメイカの漁には長い歴史があります。年間を通じてたくさん獲れる、私たちの食卓になじみの深い魚介類として、佐渡の沿岸ではイカ釣りが盛んに行われてきました。

暖流に乗ってきたイカが、佐渡沖の寒流の壁に阻まれることで、大量に水揚げされるメカニズムについては、前号で紹介したところですが、多くのイカを水揚げするために、佐渡では漁労道具や漁法も同時に発達してきました。

イカは明るいところに集まる習性があり、そのため明るい集魚灯をたくさんつけたイカ釣り船が出漁します。沖の漁火は佐渡の風物詩でもあります。現代では巻き上げ機により釣り上げた

イカを獲り込みます。電気以前の時代には、船べりで火を焚いてイカを



佐渡式イカ釣り具

集め、ツノ・ヤマデ・ソクなどの道具を手には、イカを釣りあげていました。これらの道具が江戸時代の後期に佐渡で開発され、イカ釣り具や技術が日本海沿岸各地に伝わっています。明治時代の初めに行われた勸業博覧会にも、佐渡のイカ釣り具が出品されています。

また、大量に獲れたスルメイカを干して加工する技術も明治時代に進歩を遂げ、スルメの品質向上への努力が続けられました。イカ釣りや加工技術のうえでも、佐渡は先進地であり、全国各地で佐渡のイカ釣り教師たちが指導にあたっていました。

このように、魚介類が豊富な地域には、海底地形や海流の影響があり、また、その魚介類を獲るために漁法や漁労道具が進歩を遂げている過程が、ジオパークを通して見てみると、よくわかります。

現在は「ブリ」が佐渡市の魚として親しまれていますが、イカも佐渡には欠かせない魚介類です。道路沿いのユニークな交通安全標語や下水道マンホールのふたなど、イカが描かれている場所を探してみてください。

◆教育委員会社会教育課

ジオパーク推進室(佐渡博物館内)

☎ 52-2447

☆夏休みに行きたい！
ジオおすすすめスポット☆
—— 椿尾 ——

佐渡には、まだまだ知られていない見どころがあります。今回は、椿尾の石切り場をご紹介します。

真野地区の椿尾集落は、能楽石工の里として、能舞台の復活や、現役の石工さんが健在であり、地域の特性を集落の活性化に生かす取り組みをしています。「佐渡みかげ」と呼ばれる火山岩の石材を切り出す石丁場を見て回ることができる遊歩道が整備され、一つひとつ違う表情を持つ石丁場を見比べることができます。

石仏などに適した椿尾石は、真珠岩質、デイサイトと呼ばれています。表面を虫メガネで観察すると、真珠のような丸い玉が観察できます。この真珠岩は比較的やわらかく、ノミをあてても大きく欠けることなく粉状に碎けるため、お地藏さまの目元や口元など細かい部分を彫ることができます。また、椿尾農村公園にある六地藏七観音も見どころです。さらに、農村公園を抜けた先にある岩本山からは、美しい佐渡の海を眺めることができます。海に向かって安置されているお地藏さまを見ることができません。農村公園からさらに集

落の奥へと進むと、石丁場があります。岩本山や石丁場見学の際は、足元に注意して見学しましょう。また、石丁場ではへびやハチなどに注意しましょう。

椿尾の石丁場から採取された岩石で、お地藏さまだけではなく墓石も作られました。最近では、佐渡を離れ、なかなかお墓参りに行けない方もいるかもしれませんが、石丁場を見学した後は、お墓参りに行ってご先祖様に感謝して手を合わせ、自身も自身のルーツだけでなく、墓石のルーツにも思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

◆教育委員会社会教育課

ジオパーク推進室(佐渡博物館内)
☎ 52-2447





佐渡ジオパーク

ジオパーク、推進日記

40

★新潟地震から50年

昭和39（1964）年6月16日に発生した新潟地震から、今年で50年を迎えました。

両津港周辺に押し寄せた津波によって、約400戸が水に浸かり、地震の揺れにより家屋や道路が壊れ、約1億2千万円にのぼる被害を受けました。新潟国体の視察のために昭和天皇が来島された直後の地震で、鬼太鼓が町内を回る夷祭りの最中に起こった自然災害です。この災害の怖さを体験している世代が少なくなっていく中で、残っている記録を確認したり、体験者の話を傾けたりして、この時の教訓を忘れずに次の世代につなぎ、今後起こりう



新潟地震でえぐられた加茂湖口の道路

る災害に備えなければなりません。防災教育は、ジオパークにおいても重要なテーマです。文部科学省では、災

害時、適切に対応できる基礎能力を培い「生きる力」を育むことや、自然が持つ恩恵と災害の二面性を理解することなどを、防災教育のねらいとしています。自然と人間との関係を考える点で、環境教育とも大いに関連しています。

私たちが住んでいる日本列島は、4枚のプレート（地球の表面の岩板）の境界に位置しています。地震はプレート同士がぶつかる境界で起きるので、日本では地震が多いのです。反対に、境界がない北欧では、ほとんど地震が起きません。このように住んでいる地域の特性を理解して、その地域で起こりうる災害とどのように共存して生きていくかを考えていく必要があります。

地震は、地球が活動している証拠です。そもそも、佐渡が海面から顔を出し、私たちや動植物などが暮らすことができるようになったのも、地震など地殻変動が繰り返されたからなのです。

◆教育委員会社会教育課

ジオパーク推進室（佐渡博物館内）

☎ 52 | 2447

